

研究室のさらなる活性化を目指した「研究室運営 ワーキンググループ」の実践

宮野公樹*, 可知直芳*, 岡本絵莉**, 山本祐輔***, 辻 高明***

*京都大学大学院工学研究科

**東京大学大学院学際情報学府

***京都大学大学院情報学研究科

概要

大学の使命である研究と教育を遂行する上で「研究室」という組織単位は極めて重要な役割を担っている。しかしながら、その研究室の運営は教員の経験にもとづく試行錯誤で行われており、教員は自らの研究室運営に関してフィードバックを得る機会も少ない。発表者らは、研究室が担う研究・教育上の機能を鑑みれば、個々の教員の研究室運営の質的向上を図る必要があると考え、これまで様々な活動を行ってきた。本報告では、これまで行ってきた教員同士の研究室運営手法に関する研究会や論理的思考の修得に重点をおいた研究計画書の開発など、その実践例を紹介する。

はじめに

平成 20 年 12 月、文部科学大臣が「基礎科学力強化総合戦略構想」に基づき有識者会合として「基礎科学力強化委員会」を設置し、本年 8 月に提言をまとめた¹⁾。そこでは科学技術における日本の世界的競争力の低下に関する問題点が抽出され、大学院改革に関する提言がまとめられている。これまでも、研究と教育の実施機関として、大学院改革に関する多くの政策が実施されてきた²⁾。その大学院で、研究と教育の実質的な単位となっているのが研究室である³⁾。そこでは“大学院教育と進行中の研究とが混在⁴⁾”しており、「継続的・集団的な交流」、「家族主義的な特徴」、「体系的教育」を特徴とする日本の研究室には教育上の利点もある⁴⁾とされる。だが研究室の閉鎖性や、教員個人の力量に依存した研究・教育活動につながる側面も否定できない。

研究室が担う研究・教育上の機能にも関わらず、従来は研究室の運営手法に焦点をあてた議論は存在しなかった。また、教員が研究室運営の重要性を認識していたとしても、教員同士で議論する機会は少なかった。そのため本ワーキンググループは様々な大学や分野、学部、職階の大学教員が交流し、教員同士では普段話す機会の無い研究室の運営方針や人材育成方針等について語り合う交流会を開催した。本交流会の目的は、教員同士で研究室運営について情報共有と省察を行い、研究室運営手法の質的向上につなげることである。

研究室運営ワーキンググループの概要

本ワーキンググループは、有志の大学教員及び大学院生による課外活動である。3～5 名のメンバーが、2006 年 3 月から継続して活動している。活動の目的を、全国の大学研究室における研究・教育活動の質的向上に寄与することとし、これまで全国の大学研究室の運営手法に関する実態調査、研究室での研究・教育活動に役立つツールの開発⁶⁾、研究室運営について教員が省察するきっかけとなる研究室内コミュニケーション教材の開発、大学教員が研究室の運営手法につ

いて議論する交流会の開催等の活動を行ってきた。発表では、大学教員が研究室の運営手法について議論する交流会について実践報告を行う。

実践内容

本ワーキンググループが実施した交流会の概要を Table.1 に示す。

実施日時	平日の夕方（18時頃から2時間程度）
実施期間	2008年11月～（2009年9月時点で継続中）
実施回数	8回（うち1回はオンラインで実施）
実施頻度	1カ月～2カ月に1回
参加者	大学教員ら10名前後 （ワーキンググループの知り合い・ウェブ上で参加申込した参加者）
取り上げたテーマ	(a)就職活動に関する研究室の教員・学生間の認識ギャップ (b)卒業論文，修士論文の位置づけ問題 (c)研究室における世代間ナレッジ共有の問題と対策 (d)研究室文化への参入と，新入生を巻き込む研究室文化づくり (e)大学院生の進学及び就職に関する現状と教員・学生の認識 (f)研究室における鬱，引きこもりの原因・予防・対策 (g)企業組織のチームビルディング論にもとづく研究室運営論 (h)研究室への参加と越境から考える研究室コミュニティ論
内容	【初期】 研究室運営に関わる具体的な問題点と対策について大学教員らが議論を行う。 【後期】 他組織や各学問分野での知見を参考にしながら，教員が自らの経験をもとに研究室運営について議論を行う。

結果と考察

本交流会は，教員が他の研究室の運営手法を情報共有し，研究室の運営について考える機会提供として役立っていると考えられる。しかし，学問分野や研究室規模，構成員の特性など，様々な点で異なる研究室運営について，教員同士がより深い議論を行い，実質的な研究室運営の取り組みにつなげるためには，研究室運営に関する体系的な議論を行うための枠組みを今後構築していく必要がある。また，より多くの大学教員が連携して全国の研究室運営の研究・教育活動の質的向上を行うためには，本交流会の議論内容の公開・活用についても検討する必要がある。

参考文献

- 1) http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/21/08/1282822.htm
- 2) 江原武一・馬越徹：大学院の改革,2/22,東信堂,5/101,(2009)
- 3) 市川昭午・喜多村和之：現代の大学院教育,208/215,玉川大学出版部,(1995)
- 4) バートン・クラーク：大学院教育の研究,466/467,東信堂,(1999)
- 5) <http://www.ikiiki-lab.org/>
- 6) 宮野公樹・岡本絵莉・可知直芳・山本祐輔・草間亮一：トライ&エラーを加味できる研究推進と人材育成に最適な研究計画書の作成，日本金属学会講演概要, 142,274,(2008)